

経営専門科目の理解を助ける
日本語マルチメディア教材作成に関する報告

Report on the Designing of Multimedia Learning Aids
for Understanding Japanese Language
Business Administration Educational Texts

山本 幸子

Yukiko YAMAMOTO

佐藤 昭壽

Akitoshi SATOH

壬生 幸子

Sachiko MIBU

概要

この報告は、日本の大学で経営を専門としている留学生のための日本語マルチメディア教材の開発について記述した。カーソルを動かしたりクリックしたりするだけで学生は漢字語彙の読みと意味、英語訳されたキーワード、正確な発音と関連語彙の用法も引ける。また、段落ごとの読みの音声も聞くことができるし、短いビデオクリップも付いている。

キーワード：マルチメディア教材、経営、漢字語彙の読みと意味、英語訳、読みの音声、ビデオクリップ

Abstract

This paper examines the development of a multimedia learning aid for foreign students of Japanese university Business Administration courses. With a simple click of the mouse, the student can find the readings and meanings of kanji and key words translated into English, correct pronunciation and alternative uses. Pronunciation and reading of short passages can also be heard, as well as short video presentations.

Keywords: a multimedia learning aid, business administration, the readings and meanings of kanji, translated into English, pronunciation and reading, video presentations

目次

1. はじめに
 - 1.1 共同研究の流れ
 - 1.2 教材作成の背景と動機
 - 1.3 授業科目に関する留学生アンケート
 - 1.4 先行研究
2. 教材の概要
 - 2.1 教材作成の手順
 - 2.2 なぜマルチメディア教材なのか
 - 2.3 教材の構成と内容
 - 2.4 商学の専門語彙の取扱い
3. 学習者への教材配布
4. 学習者の評価アンケート
5. 残された課題
6. おわりに
7. 参考文献

1. はじめに

1.1 共同研究の流れ

この教材作成は、平成13年度及び14年度の共栄大学共同研究助成費を受け行った。ここで共同研究の経緯を簡単に説明しておく。留学生支援のための副教材を作成するため、留学生科目担当の山本が専門科目担当の佐藤、教養科目担当の壬生に協力を申し入れた。当初は専門科目と教養科目の両方の副教材を作成する予定で議論を重ね、教養科目向けのレジュメ教材や参考資料の添付などを考え実際に試作教材も作成するまでに至ったが、留学生にとって負担の重い教材となってしまうあまり有効な教材とはなり得なかった。そこで専門科目にしばらくマルチメディア教材を作成することに方針を変えることとし、壬生は教材作成のヒントやアイディアを出し、アンケート作成の作業を担当した。

こうしてそれぞれの立場から3名で議論を重ねながら教材作成を進めた。教材作成の上で日本語教育以外の立場からの検討を得たことは、有効でかつ貴重な経験であった。大学の中で教材作成を含めた科目準備をする場合、異分野からの提言を積極的に受けながら専門科目、教養科目などの区別なく協力し合える態勢を整えていくことが、今後の大学教育を行う上で重要な鍵となることだろう。

1.2 教材作成の背景と動機

本学の留学生の総数は4学年で118名と全学生の約1割を占める規模だが、留学生限定対象の科目は日本語Ⅰ、日本語Ⅱ、日本事情の3つと少なく、その他の科目については日本人学生と同じ条件で履修することになっている。

本学の留学生の日本語力レベルは、全体の約1/3が日本語能力試験1級に合格しているというレベルであるが、1級合格者でも講義を1回聴いただけで日本人学生と同様に語彙を理解し、習得していくことは困難であると思われる。

それに加え、本学では Semester 制を採用しているため、週2回というハイペースで学ぶ科目も多く、留学生にとってはさらに学習が厳しい環境だ。

そこで、どのような日本語副教材があれば、留学生の講義への理解が深まり習得が促進されるのだろうかと考え、まず留学生に対して「留学生科目以外の授業科目に関するアンケート」を行ったところ、以下のような結果を得た。

1.3 授業科目に関する留学生アンケート

留学生が本大学の科目についてどう捉えているかを把握する参考資料として「留学生科目以外の授業科目に関するアンケート」の結果を記す。(平成15年7月実施、回答者数は当時の1年次28名、3年次14名の計42名)

(1) 日本語能力4技能の自己評価

得意な技能……「聞く」1位・「読む」2位

不得意な技能…「話す」3位・「書く」4位

(2) 授業の理解状況

ほとんど理解できる……7.1%

だいたい理解できる……64.2%

半分しか理解できない……28.6%

ほとんど理解できない……0%

(3) 授業が理解できない理由 (複数選択可)

1位 教員の話す日本語に問題……22名

2位 教科書の日本語に問題……17名

3位 板書の日本語に問題……7名

その他の自由記述の箇所には、専門用語が多い、が2名、また、初出の単語が多い、自己の能力・注意力不足、質問しても答えてくれない、教科書やプリントと別の話をする、という記述が各1名ずつあった。

(4) 先生の話が理解できない理由 (複数選択可)

- 1位 語彙が専門的で難しい…… 21名
- 2位 話し方が速すぎる…… 12名
- 3位 発音がはっきりしない…… 9名

(5) 教科書に望む改善の工夫 (複数選択可)

- 1位 漢字に読み仮名が欲しい…… 15名
- 1位 重要語に英語等の訳が欲しい…… 15名
- 3位 音声教材が欲しい…… 6名
- 4位 カタカナ語にスペルが欲しい…… 5名

以上のようなアンケートの結果からも、専門的な用語が多く、教科書の日本語も難しいと判断され、さらに担当教員も話法を留学生向けに調整することの少ない専門科目において、その理解を助ける副教材を作成することには意義があると思われる。またかれらの得意な「聞く」・「読む」技能を生かした教材、さらに留学生にとって学習に集中できる負担の少ない教材をと考えていったとき、マルチメディアタイプ教材を作成することが有効であると考えられる。

また、このアンケート結果は教材の構成と内容にも示唆を与えてくれる。留学生は漢字の日本語音訓がわからなければ発音できない。さらに辞書を引き意味を調べることもできない。こうした事情から「漢字に読み仮名」と「音声」が求められている。さらに専門用語への対応として「重要語に英語等の訳」という配慮が、「カタカナ語」の多さとわかりにくさから「スペル」が求められていることがわかる。これらをすべて満たし得るマルチメディア教材は留学生にとって有効に働くのではないだろうか。

1.4 先行研究

マルチメディアタイプの教材は、日本語教育においても数年前から急速に開発されるようになって来た。

例えば、目黒明子他の「ビデオクリップを活用したオンライン教材開発の試み」(2001)では、動画を用いたミニドラマによる日本語学習教材をインターネット上で提示し、海外の大学で学ぶ日本語学習者のためにも役立つものとなっている。

また、望月源他の「DL-MT:文章中の情報を多面的に提示して読解を支援する」(2001)や北村他の「日本語読解学習支援システムにおける多言語対応について」(2001)では、日本語学習者が日本語教材を読むための辞書型の教材を開発している。辞書型の教材は確かにどの日本語素材を読解する場合も使えるという汎用性という利点があるが、学習者に

とって二度引きの手間がかかるという欠点もある。またその文脈にぴったりと合った語彙の説明がなされないために、学習者が語彙の意味を取り違えるという問題も生じるおそれがある。できれば学習者の手間を省き個々に対応する配慮がなされた、学習者にとって負担の少ない教材が望まれるところである。

2. 教材の概要

2.1 教材作成の手順

この教材作成は、以下のような手順で行った。

① 専門科目と共同研究者を決定する。

「商学概論」（担当者：佐藤昭壽）に決定した。この科目は本学の専門科目の中では1、2年対象の基礎科目の選択科目に該当する。多くの1、2年次の留学生が選択するという理由からも、適切であると考えた。

② 教科書の著者へ日本語副教材作成に関する許可を求める。

『商学通論』同文館（久保村隆祐編著）の教科書の著者に対して、専門科目担当者から日本語副教材作成に関する許可を求め、無事許可が得られた。

③ 主な内容と構成を決定する。

教材を作成するに当たり、講義の主な部分を文章化し講義中に使用しているレジュメ（作成：佐藤昭壽）を、そのまま活用することとした。

④ 日本語教材部分を作成する。

専門用語などの語彙の抽出は専門科目担当者と協議をしたが、その文法的解説、関連語彙の付加、日本語の訳付け等の日本語教材部分は、主に山本が担当した。また、動画の部分は専門科目担当者である佐藤が特別に講義しているところを教材用にビデオ撮影し用いることにした。その他の音声部分の吹き込みについては、「会社ごっこ CLUB」の部員の学生に依頼した。

⑤ マルチメディア教材を作成する。

教材の種類としては動画、音声を多用したマルチメディア教材を作成することとした。またマルチメディア教材を作成するに当たっては、本学の学内サークルである「会社ごっこ CLUB」の協力を得ることができた。

2.2 なぜマルチメディア教材なのか

ここで、一般に言われているマルチメディア教材の利点をまとめておく。

[学習者側からの利点]

- ① 語学学習にとって重要な音声聞ける。
- ② 必要な部分だけが検索できる。
- ③ 視覚的に楽しめる。
- ④ 以上のようなことが反復して行える。
- ⑤ 取扱いが簡単である。
- ⑥ 紙の媒体のような不便さがない。

[教材作成者側からの利点]

- ① コンテンツの改善が容易である。
- ② 学習管理が容易である。

[学習者側からの利点] を総合して考えると、マルチメディア教材が自習用教材として適していることがわかる。そもそも専門科目の担当者にとって授業中に留学生に特別に配慮する時間は取れない。それならば自習用副教材を添付することで、留学生をフォローする方が現実的な方法だろう。コンテンツの改善の容易さから考えると、学習者からの要求にも即応できる書き換えや学習者との双方向的なやりとりも可能な教材となり得る。

ただしマルチメディア教材がよいことばかりかと言えそうとも言えず、特に現状では教材作成の作業に手間がかかり過ぎるとい難点があると言える。近い将来もっと使いやすいソフトが開発され教材作成がより簡単な作業となることを望みたい。しかしそれには今しばらくの時間が必要だろう。

2.3 教材の構成と内容

この教材は、以下のような構成と内容をとる。

- ① 教材を開いた後の最初の画面には表紙部分が登場。次に10章分のタイトル部が出て、それぞれをクリックすると各章に移動することができる(図1参照)。
- ② 各章の最初の動画部分ををクリックすると、この講義の担当者が章毎の日本語による要約を述べた数分間の音声と映像が再生される。
- ③ 漢字語彙にカーソルを当てると、ひらがなで記述された読み仮名、英語訳、関連語彙、専門語彙の場合はパラフレーズした日本語の説明が表示される(図2参照)。
- ④ カタカナ語彙にカーソルを当てると、原語(主に英語)、必要な場合は日本語訳が表示される。
- ⑤ 段落毎にある音声記号をクリックすると、段落毎のまとまった長さの音声再生され

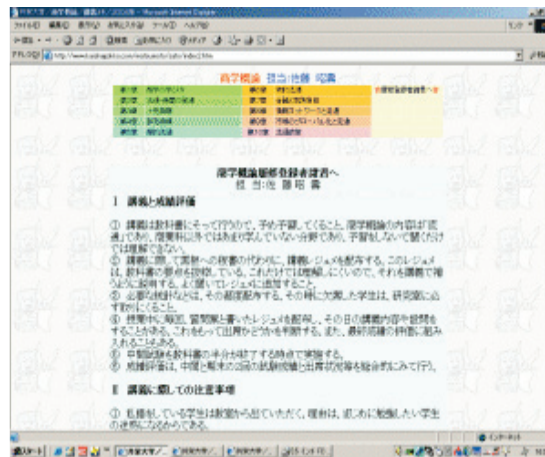


図1 各章タイトル画面

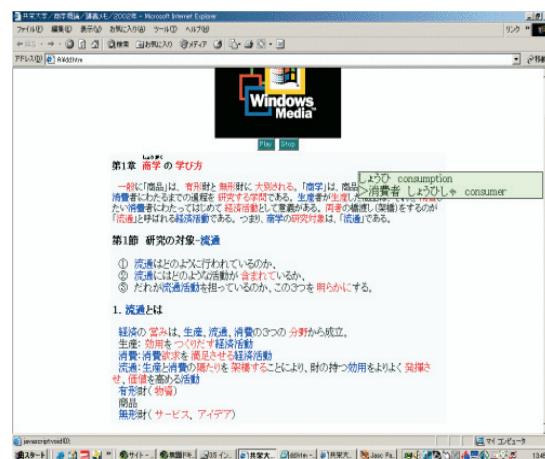


図2 漢字語彙の説明表示部分

る。

- ⑥ 語彙については、初出の一般語彙は赤、初出の専門語彙は緑、2度目以降はどちらも青と色分けし、地の文は黒で記述した。

2.4 商学の専門語彙の取扱い

商学の専門語彙の選定と語彙の説明は、『マーケティング用語辞典』、『流通用語辞典』、『経営用語辞典』、『経済学基本用語辞典』（以上日本経済新聞社刊）を主軸として決定した。これらにも載っていない専門語彙は、『金融用語辞典』、『株式用語辞典』、『会計用語辞典』、『貿易為替用語辞典』（以上日本経済新聞社刊）やインターネット上の辞典を使用し、語彙の説明を加えた。

選定した語彙数は、以下の表の通りである。

表1 『商学概論』レジュメ中から選定した専門語彙と一般語彙の数

	専門語彙	一般語彙	計
1章	38	127	165
2章	33	194	227
3章	50	206	256
4章	47	148	195
5章	35	154	189
6章	34	109	143
7章	20	10	30
8章	31	134	165
9章	26	21	47
10章	18	100	118
計	332	1203	1535

一般語彙については漢字の読み方の難しい語彙、文法重要語（連語、複合助詞、文末表現など）、カタカナ語などを中心に選定した。選定と語彙説明については、早稲田大学日本語非常勤講師で日本語教育専攻の伊藤宏美氏の協力を得、10章を半分ずつ分担し、エクセルで入力したファイルを1章から交互にメールでやりとりし、語彙説明を互いに吟味し修正するという形で作業を進めた。語彙数が多すぎると画面が煩雑になるので数を抑えることにも気を配った。また専門語彙の選定基準としては、我々のような異分野の者にとってわからない言葉はできるだけ採用し説明を加えることとした。

3. 学習者への教材配布

学習者へのこの教材の配信は、当初パスワード等により『商学概論』の履修登録を行った学生のみがWeb上で閲覧できるようにする予定であった。しかしこの方法は大学の情報管理の観点から難しいため、この教材をCD-ROMに焼付け相当数用意し『商学概論』を受講する留学生に貸与することとした。

4. 学習者の評価アンケート

CD-ROM教材作成後、実際に教材を視聴してもらい「『商学概論』留学生用副教材に関するアンケート」を1年次留学生対象に行った。結果は以下の通りである。

(平成16年7月実施、回答者は男性12名、女性12名の計24名)

ビデオクリップと各段落の音声部分に対する評価は男女で逆の結果に分かれたが、すべての平均評価値で5段階評価での3を超えた。特に各単語のルビ・説明・英訳等に対する評価は男女問わず高かった。

表2 教材の各項目に対する学習者の男女別評価

番号	項目	男性	平均評価値	女性	平均評価値	全体	平均評価値
①	冒頭のビデオクリップ	興味有	3.00	興味有	3.45	興味有	3.23
		役立つ	3.00	役立つ	3.30	役立つ	3.15
②	各段落の音声	興味有	3.18	興味有	3.09	興味有	3.23
		役立つ	4.00	役立つ	3.22	役立つ	3.61
③	各単語のルビ説明・英訳等	興味有	3.99	興味有	4.00	興味有	3.95
		役立つ	4.09	役立つ	4.25	役立つ	4.16

(表内の数値は5段階評価での平均値)

5. 残された課題

この教材には、以下のような残された課題がある。

- ① レジユメをそのまま利用したため、画面に文字情報を詰めすぎの印象がある。
- ② 単語の意味が英語訳のみなので中国語訳、韓国語訳が欲しい。
- ③ ビデオクリップ画面の談話に字幕が欲しいし、動画の画面が寂しい。
- ④ 音声部分が単調なので、もう一工夫欲しい。
- ⑤ 当初予定の Web 配信ができなくなり CD-ROM に焼き付けた教材となったため、これらの教材改変が困難になった。

6. おわりに

初めて作成したマルチメディア教材なので、作ってから変更できない部分でこうすればもっとよかったかもしれないという箇所も数多くあったが、この経験を基にさらに日本語教育教材を作成する上でのバリエーションを増やしていければと考えている。

(謝辞)

今回の教材を作成するにあたり、「会社ごっこ CLUB」の主宰者である海老原武氏にマルチメディア教材化に関するご指導とご協力を、所属学生の松本らんるさんにはお手伝いを頂いた。また商学の専門語彙や一般語彙の語彙シートを作成するにあたり、早稲田大学非常勤講師で日本語教育専攻の伊藤宏美氏にご協力を頂いた。ここに謝意を表する。

参考文献

- (1) 目黒秋子他, “ビデオクリップを活用したオンライン教材開発の試み”, 日本語教育方法研究会誌 Vol.8, No.1, 2001, pp.30-31
- (2) 望月源, 寺朱美, “DL-MT: 文章中の情報を多面的に提示して読解を支援する”, 日本語教育方法研究会誌 Vol.8, No.2, 2001, pp.16-17
- (3) 北村達也, 川村よし子, “日本語読解学習支援システムにおける多言語対応について”, 日本語教育方法研究会誌 Vol.8, No.2, 2001, pp.24-25
- (4) 山本幸子, 佐藤昭壽, 壬生幸子, “経営専門科目の理解を助けるマルチメディア教材の作成”, 日本語教育方法研究会誌 Vol.9, No.2, 2002, pp.8-9
- (5) 山本幸子, “専門科目の理解を助ける留学生向け自習用副教材の作成”, 2003年度日本教育メディア学会第10回大会発表論文集, pp.106-109